

株式会社アドバンテスト

2020年3月期(2019年度)第1四半期決算説明会 質疑応答要旨

2019年7月24日(水)

Q: メモリ・テストの見通しについてだが、日・韓で投資延期があった一方で、中国では大型投資が計画されている。それを総合しても、メモリ・テスト需要の今後の見通しは厳しいか？

A: メモリ・テストに関しては、4月時点の見通しより減速している。特にメモリ前工程向けの需要が落ちている。一方で当社が強いメモリ後工程向け、特に高速メモリ向けのビジネスは継続して獲得できている。

市場見通しとしては、NAND向けが当初見通しから20~30%下がるリスクがある。中国に関しては実需とは別に投資を行う傾向があり、今後も中国ビジネスを取り込んでいきたい。

Q: 中国に拠点を持つOSATが海外に拠点を移す動きが加速している。これにより御社にどの程度のテスト需要の恩恵があるか？

A: 地域間のサプライチェーンの移動は、テスト全体の需要には大きく影響しないと考えています。今のところ、具体的な引合いもありません。

Q: 第1四半期のSoCテスト受注は主にスマートフォン向けで上振れ、とのことだが、スマートフォン向けに限るとどの程度上振れしたのか？また5G関連のスマートフォン関連受注であるが、エンジニアリング用途と量産用途、それぞれの金額比率は？

A: 第1四半期のSoCテストの受注上振れは、当初計画比およそ150億円。そのかなりの部分がスマートフォン関連と考えている。この第1四半期は、スマートフォン関連業界で大きな変動があり、また5Gに絡んだ投資が多くなされたが、5Gの量産フェーズはまだ先と考えている。

Q: 第1四半期のSoCテスト受注は昨年より伸びている。2019年のSoCテストの市場シェアはどの程度と予想しているか？また期初は競争激化を念頭に、売上総利益率について多少保守的に前提を置いていたと思うが、今の見通しは？

A: 2019年のSoCテストのシェアは、2018年の数字を維持・改善可能と予想しています。また売上総利益率に関しては、4月時点は競争激化のリスクがあると考えていたが、今までのところは売上総利益率に大きな影響はありません。

Q: SoCテスト好調により製品ミックス改善が見込まれるにもかかわらず、利益予想を上方修正せずに据え置いた理由は、今後コスト増の懸念があるためか？

A: 開発投資、設備投資等は当初計画通りに行う予定で、また、経費見通しに大きな変更はない。ただ価格競争の激化や為替などまだ顕在化していないリスクもあり、保守的かもしれない。

いが予想を据え置いたもの。

Q：メモリ・テストの受注の回復時期は、4月時点では2019年度の第3四半期としていた。それが第4四半期にずれ込んだということか？

A：それ以上遅れるかもしれないが、4月時点の見通しからは、回復時期が3ヶ月遅れると現状では見ている。日々、状況が変動しており先を読みづらい面があるが、現時点では2019年度の第4四半期に受注回復すると見込んでいる。

Q：SoCテストの需要上振れの要因として、大手携帯電話メーカーがエンティティ・リストに入ったことによる駆け込み需要があったか？

A：駆け込みの影響ではなく、5G用半導体のエンジニアリング用途が需要上振れに影響したものと考えている。また大手携帯電話メーカーがエンティティ・リストに入ったのは今年の5月のことであり、第1四半期の受注・売上に大きく影響はしていないと考えている。また、第1四半期の需要は当該大手携帯電話メーカー関連の需要だけではなく、全体的に多かった印象。ただ、この受注水準が通年続くとは思っておらず、第2四半期の受注は若干落ちるかもしれない。

Q：第4四半期のメモリ・テストの需要の戻りは、NANDフラッシュとDRAMのどちらを期待しているのか？また、その回復の牽引役として想定するのはスマートフォンか、あるいはデータセンターか？

A：ハイエンドのDRAM向けから戻ってくると考えている。スマートフォンやHPC（ハイパフォーマンス・コンピューティング）向けで、DDR5やLPDDR5、HBM2といったアプリケーションの伸びを第4四半期以降に見込む。NANDフラッシュに関してはサーバー関係の本格投資再開がまだ見えていないため、先にDRAM向けが回復し、その後NANDフラッシュ向けが戻ってくる展開を想定している。

Q：第1四半期の売上総利益率改善の要因は何か？

A：プロダクトミックスの好転による影響が一番。また、第1四半期は棚卸評価損の影響が第4四半期よりも軽いという面もある。

Q：SoCテスト受注150億円の上振れは、第2四半期に見込んでいた需要が第1四半期に前倒しになったものか？

A：第1四半期に需要シフトした分は一部あるが、第2四半期の需要見通しは当初計画からそれほど変化していない。上期としては、第1四半期に上振れした150億円と同額の上振れを見込んでいる。

- Q：5G 向けの需要の伸びで、今回の SoC テスタ受注 150 億円の上振れを全て説明できるのか？
また 5G 用半導体に関してはエンジニアリング向けでまだ量産フェーズにない、と先に説明があったが、過去の御社は半導体の量産フェーズに業績が大きく伸びる傾向があった。今回は過去のサイクルと違い、エンジニアリングフェーズでも需要が伸びているのか？
- A：5G 向けのテスタ需要の伸びが SoC テスタ受注の上振れを全て説明するものではない。HPC 関連のテスト需要なども増えており、それらを含めて 150 億円の上振れとなったもの。また、先端ノードを適用する 5G 用のアプリケーション・プロセッサやベースバンド・プロセッサはまだ量産フェーズに至っていないが、技術の進化に伴い半導体の製造難易度が上がっていることで、エンジニアリング用途であってもテスタの所要台数は過去と比べて伸びている。

- Q：LTE 関連で追加の駆け込み商談のようなものはあったか？
- A：直接的にそのような動きがあったという印象はない。携帯電話メーカー同士、あるいはチップメーカー同士の競争が強まったことで、半導体のテスト需要がある程度上昇した面はあるかもしれないが、それが駆け込み需要だとは考えていない。

- Q：5G 拡大に伴うテスタ市場押し上げ規模として\$200M~400M を見込む、と 4 月の決算説明会でコメントがあった。足元の 4G や 5G 関連の需要動向を踏まえ、その見方は変わったか？
- A：5G がテスタ市場へ及ぼす影響については見方に大きな変化はない。ただ需要が若干前倒し気味に推移し、1Q のテスタ需要として顕在化したという印象がある。また関連デバイスがまだ全く量産入りしていない、中量評価の段階でも足元これだけの需要があるということは、量産が拡大する 2020 年以降、さらに大きな需要を期待できるのではないかと考えている。

以上

※本資料に記載されている内容は、決算説明会の質疑をもとに当社の判断で要約したものです。また本資料には、将来の事象についての、当社の現時点における期待、見積りおよび予測に基づく記述が含まれております。これらの将来の事象に係る記述は、当社における実際の財務活動や活動状況が、当該将来の事象に係る記述によって、明示されているものまたは暗示されているものと重要な差異を生じるかもしれないという既知および未知のリスク、不確実性その他の要因が内包されており、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。